

1524年の「大洪水」の予言 近世初期のある占星術論争について¹⁾

藤 井 明 彦

I. 序言

1499年の初頭に数学者で天文学者のJohannes Stöflerは同じく数学者・天文学者のJacob Pflaumとの共著『新年鑑Almanach nova』²⁾を刊行する。この500葉(1000頁)近くの大著は「天体位置推算暦Ephemeriden」と呼ばれるものの一つで、軌道計算によって得られた七つの惑星(太陽・月・土星・木星・火星・金星・水星)の黄道十二宮での位置を1499年から1531年まで年月日ごとに表に記したものである。Stöflerはそのなかで1524年に関しては2月に20もの「合」が起こり、そのうちの16の「合」は水のサインを持っていること、そしてそれは地球上のあらゆるものにとって明らかな変異、変動、転換を意味すると警告した。この場合の「水のサイン signum aqueum」とは黄道で隣り合う宝瓶宮と双魚宮のことで、最も動きの速い月は2月2日から9日までと比較的短期間だが、その他の惑星はすべて2月のあいだその2つの宮のどちらかに留まっている(図1参照)。³⁾ここから、地球上のあらゆるものを襲う変異、変動、転換とは旧約聖書の創世記に記されているような、地上のすべてを覆い尽くす「大洪水 Sintflut」ではないかと恐れられるようになった。

この1524年2月の惑星合は当時の人々にとっては大きな関心事で、ヨーロッパ全体で59人の著述家が少なくとも69の著作を書き、それが少なくとも150の版で出回っていたという集計がある。そのうちの20人近くがドイツ語の著作者で、少なくとも27点のドイツ語の著作が60の版で出回っていたという調査結果もある。⁴⁾

住民のなかには所有地を売却したり、高い土地に避難小屋を建てたり、家の前や家の中に小舟を用意する人が出てきたばかりでなく、市中に危険な水流が生じないように市壁に

-
- 1) 以下、本論ではAstrologieに「占星術」あるいは「占星学」、Astronomieに「天文学」あるいは「天文学・占星学」という日本語を当てていく。天体の位置や運動について研究するのがAstronomie、それが地上(人や社会)に与える影響を論ずるのがArtrologieであるが、太陽や月のように地上の自然に顕著な影響を与える天体もあるため、両者の境界は判然としなことが多い。Vgl. Frühneuhochdeutsches Wörterbuch, Bd. 2, Sp. 268ff.
 - 2) Stöfler, Johannes / Pflaum, Jacob: Almanach nova. Daran: Johannes Regiomontanus: Commentarium in Ephemerides. Ulm 13. II. 1499. GW: M44052. München, BSB: Ink S-591. 図1に1524年2月の頁を挙げた。
 - 3) 1月31日に双魚宮に入り2月24日に次の宮の白羊宮に移動する金星も、2月の大半は双魚宮に留まっていることになる。
 - 4) Vgl. Talkenberger (1990), S. 155. 匿名の著作も多く、精確な数は不明。

水を逃がす穴（侵入者を防ぐための格子付き）を穿った町もあれば、降ってくる雨粒は人間の頭ほどの大きさで家屋は全部壊れてしまうという噂も広まった。その一方で幾日にも渡る祈りの行列や贖罪の儀式が催されたという記録もある。⁵⁾

ここで言われている惑星の「合」とは、七つの「惑星」（太陽・月・土星・木星・火星・金星・水星）が地球から見るとほぼ同じ方向に位置することで、天文学で「惑星直列」と呼び慣わされているものに当たる。ただし太陽が含まれているため、実際は太陽光の強さで他の惑星は殆ど見えない。日の出前や日の入り後の太陽光が弱い時間に幾つかの惑星が見える可能性はあるが、その背後に水瓶座や魚座が控えているわけではない。黄道十二星座は星座によってそれぞれ幅が異なるが、宝瓶宮や双魚宮といった黄道十二宮は春分点から黄道（太陽の通る道）を30度ずつ12区画に一律に区切ったものであり、おまけに歳差（地軸の円錐運動）のために現在ではほぼ1区画分、16世紀初頭でもかなりの程度ずれてしまっていた。つまりこの水のサインにおける惑星合というのは空を見上げても実際に観察できるものではなかった。これが日蝕や月蝕のような直接観察ないし体験が可能な天体現象との根本的な違いで、「天体位置推算暦」の記載とそれに基づく予言を読んで人々は「見えないもの」を想像していたことになる。

占星術に関しては例えばブランド（Sebastian Brant, 1457-1521）が『阿呆船Das Narrenschiff』（1494年出版）の第65章「星を重んじること von achtung des gstrins」で、星に生活や行動の指針を求める者は神を正しく信ずる者ではないと批判していたし、イタリアの哲学者のピコ・デッラ・ミランドラ（Pico della Mirandola, 1463-1494）も『予言占星術論駁 Disputationes adversus astrologiam divinatricem』という大部の書物を1495年に著している。しかしこういった論調と並んで、改革者ルターの登場や15世紀末の梅毒の流行の原因を1484年の天蠍宮での惑星合に遡って求めるような議論も行われていた。⁶⁾ 今回の惑星合は過去のことでなくこれから起こるもので、しかも旧約聖書のよく知られた恐ろしい場面を想起させるものだった。オスマン帝国軍の侵攻、ルターの宗教改革運動、皇帝マクシミリアン一世の崩御（1519年）、1520年1月にウィーンの空に現れた「3つの太陽」⁷⁾といった世情の不安を煽る要素と相まって、当時の人々が尋常でない心理状態に追い込まれていったことは想像に難くない。

ドイツ内外の図書館を巡り、この1524年の惑星合に関わる文書を探索して初めてその全体の様子を明らかにしたのがグスタフ・ヘルマンの1914年の論文「天体気象学の全盛期から、J.シュテッフルーの1524年に向けての予言」（Gustav Hellmann: Aus der Blütezeit der Astrometeorologie. J. Stöfflers Prognose für das Jahr 1524）である。ラテン語著作の62の版、ドイツ語著作の50の版、イタリア語著作の10の版、スペイン語著作の6つの版な

5) Vgl. Mentgen (2005), S. 135ff. なお市壁に穴を開けたという記録があるのはドナウ川に臨む Regensburg 市。

6) Warburg (2010 [1920]), S. 468ff.

7) 空中の氷晶の作用で現われる「幻日」現象のことと考えられる。

ど合計133の版本を見つけ出し、書誌学的に完備したリストを作成している。この後にも関連文書の発見はあったが、研究の基礎がHellmannによって築かれたことは疑いない。Hellmannはまた、各著者の論証の仕方にはその経歴や素養が反映されていて、占星術による論証、占星術と史実による論証、神学寄りもしくは神学と史実による論証があると述べている（この点については後述する）。

いわゆるヴァールブルク学派の創始者であるアビ・ヴァールブルクも1920年に発表した論文「ルター時代の言葉と図像における異教的・古代的予言」(Aby Warburg: *Heidnisch-antike Weissagung in Wort und Bild zu Luthers Zeiten*)のなかでこの惑星合を取り上げている。ヴァールブルクは既にフェラーラのスキファノイア宮殿のフレスコ画を占星術的観点から詳細に分析していたが、この惑星合に関しても、イタリア・ルネサンスからドイツ宗教改革に関心を転じた時期に自ら幾つかの文書（カーリオン、ラインマン、タンシュテッターのもの等）を収集していた。ヴァールブルクによればその当時の「大洪水パニック」はまさに「極度の惑星への恐怖」に根差すもので、かつその惑星の魔神たちは現実に力を有する存在と考えられていたため文書の扉絵や挿絵に人間に似た姿で描かれているのだとしている。ヴァールブルクの論調はルネサンス期、宗教改革期を異教古代の魔神たちが復活し、古代的不安がその時代の社会不安を増幅した時期と捉える姿勢で一貫している。

ハイケ・タルケンベルガーの『大洪水 1488年～1528年の占星術パンフレットのテキストと木版画における予言と当時の出来事』(Heike Talkenberger: *Sintflut. Prophetie und Zeitgeschehen in Texten und Holzschnitten astrologischer Flugschriften 1488-1528*)は1995年に出版された600頁近くの浩瀚な研究書で、副題にあるとおり叙述の範囲は15世紀末から1528年にまで及ぶ。特に各文書の扉絵と挿絵の分析に重点が置かれていて、その内容は詳細かつ的確で間然とする所がない。またこれまでの唯一の日本語研究文献である森田(2009)も様々な著作の扉絵ないし挿絵を分析して、当時の社会情勢(宗教改革や農民戦争)との繋がりを探ることに主眼を置いている。ただし扉絵、挿絵は著者の主張ないし本文の内容と一致しているとは限らない。別の印刷工房で再版される際には絵柄も一新されることが少なくなかったし、逆に別の文書に同じ図案が使われることもあった。またタルケンベルガーは各文書を主にローマ教会擁護派か宗教改革派かという観点から検討しているが、大半の文書の大半の内容は占星術に関する議論で占められており、政治的・宗派的な立場が表明されることがあっても多くは間接的な表現に留まっている。

ゲルト・メントゲンの2005年の著書『中世における占星術と公共性』(Gert Mentgen: *Astrologie und Öffentlichkeit im Mittelalter*)はハーバマスの「公共性」の概念をより一般的に、閉ざされたサークル外での認知と公衆の反応として捉え、⁸⁾ 1524年2月の惑星合に関する予言の受け止められ方とその事後の様子を、当時の記録文書を広く調査して跡付けている。この惑星合を巡る騒動を、土星と木星の1286年の大会合が世界に終末をもたら

8) Vgl. Mentgen (2005), S. 14.

すと予言した「トレド書簡Toledobrief」の秘儀性と関連づけて、占星術の予言が秘儀的伝承から公共の言論空間へと展開されていく推移を論じている。ハーバマスの概念を持ち出す必然性は直ちに首肯しがたいものの、このメントゲンの資料探索のおかげで当時の人々の反応がより具体的に分るようになった。

2012年に出版されたジョナサン・グリーン『印刷と予言 1450年～1550年の予言書とメディア転換』(Jonathan Green: Printing and Prophecy. Prognostication and Media Change 1450 – 1550)はその時期の予言文書類を幅広く概観したもので、1524年2月の惑星合に関しては、それまで学者の間だけで行われていた論争が初めて公になったと述べている。⁹⁾ 叙述は概観的な内容のものが多いが、巻末(155～203頁)に、ドイツ語圏で1550年までに印刷出版された予言書類(大半はドイツ語あるいはラテン語)を著者別に挙げ、かつそれぞれの著作の版(初版、同じ工房による再版、他工房による複製版等)を詳細にリストアップしている。

この惑星合に関連する大半の文書の大半の内容は占星術に関する議論で占められていたが、これまでの研究はその内容を——おそらくいかがわしいもの、あるいは面倒で難解なものとなし——本格的な検討の対象にして来なかった。ヴァールブルクにはその準備があったと考えられるが、結果的にこの件に関しては扉絵の分析に留まっている。本稿ではこの騒動の出発点になっている占星術の世界に深く分け入ってみたい。¹⁰⁾

以下、本文を読むことの出来た18の文書を基本的に年代順に検討していく。もちろん関連文書のすべてではないが、主だったものはデジタル化のおかげで閲覧が可能になっている。¹¹⁾ まず書誌学的情報¹²⁾を挙げたあと、《著者・刊本》、《概要・結論》、《特徴》に分けて記述する。《結論》は、この惑星合によって何が起こるか(起こらないか)という点

9) Vgl. Green (2012), S. 149.

10) 占星術は基本的に「黄道十二宮」、「七つの惑星」、「十二のハウス」という3つの要素から成り立っている。「黄道十二宮」は実際の黄道十二星座を元にしていて、星座によって幅が区々な後者と異なり、春分点から次のような順序で30度ずつ黄道(太陽の通る道)を区分している: 白羊宮、金牛宮、双子宮、巨蟹宮、獅子宮、処女宮、天秤宮、天蠍宮、人馬宮、磨羯宮、宝瓶宮、双魚宮。「七つの惑星」は太陽(恒星)、月(地球の衛星)、土星、木星、火星、金星、水星のことで、地動説が一般的になる前はすべて地球の周りを回る天体と考えられていた。地球に近いと思われていた順に挙げれば月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星となる。太陽以外の惑星や月も黄道面の付近を通っているため、それぞれの速度で黄道十二宮を移動して行く。一般的に太陽、月、金星、木星が吉星、土星と火星が凶星、水星は両方の性質をもつと考えられていた。なお地球から見た惑星間の角距離を「アスペクト」と言い、120度(三分)と60度(六分)が吉、180度(衝)と90度(矩)が凶、0度(合)の場合はその惑星同士の性質が強まる。最も外側を回る土星と木星の合は「大会合」と呼ばれ、古来何か特別な事が起こるとされてきた。なおアスペクトには最大で10度程度の許容度数(オーブ)が認められている。「ハウス」は天球の12の区域で、惑星や宮の影響が現れる人生の局面・側面を表す。ホロスコープで向かって左側に位置する東の地平線から時計と逆回りに番号がふられ、それぞれ次のような意味を持つ: 第1ハウス「生命」、第2ハウス「財産」、第3ハウス「兄弟」、第4ハウス「父」、第5ハウス「子供」、第6ハウス「病気」、第7ハウス「結婚」、第8ハウス「死」、第9ハウス「知恵」、第10ハウス「天ないし王」、第11ハウス「友」、第12ハウス「敵」。ハウスは12分割という点では黄道十二宮と同じだが、一律に30度である宮と異なって、各ハウスの幅には特定の決まりがない。これはハウス分割に非常に様々な方法があることに起因している。

での結論である。18の文書の記述を終えた後に、各著作を主にその「論拠」に基づいて分類し考察を行う。

II. 「大洪水」をめぐる論争

I. Alexander Seitz: „Ain Warnung des Sündtfluss oder erschrockenlichen wassers Des xxiiij. jars auß natürlicher art des hymels zü besorgen ...“ 4°, 6 Bl. [Augsburg: Erhard Oeglin], [1520]. VD-16 S:5396, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 511,11.

《著者・刊本》ザイツはヴェルテンベルクの医師だったが、農民の暴動に関与したことで追放され、1514年にスイスへ移住しバーデンで開業。その後ミュンヘンに移り特にペストの防疫にあたって功績を挙げたが、バイエルンの医師たちの瀉血法を非難したために1521年に失職。宗教改革者ツヴィングリの斡旋でチューリヒやバーゼルで医師の職を得るが、そこでも周囲との衝突が絶えなかったと言われる。生没年は不明。¹³⁾ この『天の自然から生じる24年の大洪水もしくは恐ろしい大水の警告』はアウクスブルクで2回刊行された他、エアフルト、ライプツィヒ、シュパイヤーでも刊行されている。¹⁴⁾

《概要・結論》1524年の2月の水の宮での合によって恐ろしい大洪水が起こる。神はノアにもう大洪水を起こすことはないと言束されたが、大洪水で滅びたヤコブ時代のアカイア国やモーゼ時代のテッサリア国の例もある。神はこの合によって悔い改めるよう警告をされているのだ。神は7つの惑星と恒星界からなる8つの天を創造されたが、それらは神の代官であり、この下々の世界に神のご意思を伝えている。天文学者・占星学者はその奇跡の業を読み解くことを学ぶわけだが、そのような徴は平民には隠されているので、神は1520年1月にウィーンで予兆（3つの太陽と3つの月）を示された。予言者ヨナを通じて神の警告を知ったニネヴェの王と臣民たちが祈り、断食、悔い改めによって神の御恵みを得たように、我々も真に悔い改めなくてはならない。

《特徴》「土星は1年3か月11日、木星は2か月10日、火星と金星は1か月、いずれも双鱼宮に留まり、水星は12日、太陽は8日、龍の頭は1年9か月どれも宝瓶宮に留まる」(a4')と細かく記しているが、これらの数字はStöffler/Pflaumの『新年鑑』の記載を見て計算すれば比較的容易に求められる。また、木星や金星のような吉星が支配する時は安寧で、逆に火星や土星のような凶星の支配する時は戦いが起こり人が死ぬといったやや初歩

11) Talkenberger (1995)が検討している文書のうちLorenz Friesによるもの (VD-16 F:2888) はデジタル化されていないため未見。

12) 著者名: „タイトル“, 版型, 紙葉数 (Bl.), 印刷都市名: 印刷工房名, 刊行年, VD-16 (Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des XVI. Jahrhunderts) の目録番号, 所蔵図書館: 分類番号の順に挙げた。印刷都市名, 印刷工房名, 刊行年が推定による場合は角括弧で表示した。なお《著者・刊本》欄で著者名をカタカナ書きし、書名の日本語訳を挙げるようにした。

13) Vgl. Talkenberger (1990), S. 184-187.

14) Vgl. Green (2012), S. 194.

的で素朴な書き方もしている (a3^v)。なおこの版のa4^v~a6^rは『天に現れた驚異の予兆の説明』と題する上記のウィーンで見られた予兆の説明。

2. Johannes **Carion**: „Prognosticatio vnd erklerung der grossen wesserung/ Auch anderer erschrockenlichenn würckungen. So sich begeben nach Christi vnsers lieben hern geburt/ Funfftzehen hundert vnd xxiiij. Jar.“ 4^o, 8 Bl. [Leipzig: Martin Landsberg], [1521]. VD-16 C:1030, Augsburg, Staats- und Stadtbibliothek, 4 Kult 186-116.

《著者・刊本》カーリオン (1499年-1537年) はテュービンゲン大学の学生時代にヨハネス・シュテッフルラーの弟子となり、またそこで教鞭をとっていたフィリップ・メランヒトンとも知り合う。若くしてブランデンブルク選帝侯ヨアヒム一世の宮廷占星術師となった彼は1535年には医学博士となるが、その2年後に急死する。¹⁵⁾ この『我らが主キリストの生後1524年に起こる、大洪水ならびにその恐るべき影響の予測と説明』はライプツィヒで計4回刊行された他、アウクスブルクでも1回刊行されている。¹⁶⁾

《概要・結論》1524年2月の合によってもたらされる災厄は過去にあまり例を見ないものだが、基礎知識もなく占星術に足を踏み入れている一介の医師 (上出のザイツのこと) が言うような全面的な大洪水ではない。変異は2月1日に始まり、途中で止むこともあるが3月3日までは続く。特に双魚宮と処女宮の下にある地域は要注意である。その後も悪性の霧が地を覆い、夏にも秋にも影響が続き冬は極寒となる。1532年にはほぼ収まるが、影響は天候だけに留まらない。聖界俗界の人々のあいだに争いや不和が生じ、キリスト教会の変革に至ることもある。膝をつき頭を垂れ、尽きることのない御慈悲を神がこの嘆きの谷にも授け給うよう祈ろう。

《特徴》この著作の特徴は、冒頭にまず90行余りの寓意的な詩が置かれていて (a1^v-a2^r)、次にその詩の寓意を作者が解き明かす (a3^v) という構成になっていることである。詩は、ある富裕の殿方が狩りに出かけたが、暗がりの中で射た獲物が山羊で、それを貧しい男の家で渋々食することになる…という調子だが、これは木星 (富裕の殿方) が人馬宮 (狩り) を過ぎて磨羯宮 (山羊) に移ったところ、そこには支配惑星である土星 (貧しい男) がいたという1521年のある時の天空の様子だとされる。1524年の2月の惑星合は、自分の家に戻った富裕の殿方 (自らが支配惑星である双魚宮に入った木星)¹⁷⁾ が王様 (太陽)、女王様 (月)、文書官 (水星)、戦士 (火星)、美女 (金星)、平民 (土星) を我が家に呼び入れ、皆を魚料理でもてなすようなものだという (a3^v)。そこで生じる様々な組み合わせが恐ろしい影響をもたらすとして本論に移っていく構成はまさに独特のものと言える。

15) Vgl. Talkenberger (1990), S. 210f. Werner Bergengruen (1892-1964) はこのカーリオンを主人公にした長篇歴史小説 „Am Himmel wie auf Erden“ (1947年刊) を著している。

16) Vgl. Green (2012), S. 165.

17) 占星術では各宮の支配惑星が伝統的に定められている。木星は双魚宮と人馬宮を、土星は宝瓶宮と磨羯宮を支配する。

3. Conrad **Gallianus**: „PRactica vff Drey ior Namlich des XXII XXIII vnd XXIII.“ 4°, 12 Bl. Straßburg: Johann Schott, [1521]. VD-16 G:224, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 90 h#Beibd. 4.

《著者・刊本》著者ガリアヌスに関しては、自らこの書で「数学と聖書学を修め天文学・占星学にも通じている」(a1^r, a1^v)と述べている以外は不詳。またこの『向こう3年、すなわち22年、23年、24年の予言書』がシュトラースブルクあるいは他の都市で再版された形跡はない。

《概要・結論》1522年、1523年、1524年の支配惑星、四季の天候、争い、病気、作物の実り等について予測したあと、最後に1524年の「大洪水」に関して以下のように述べている。天体位置推算暦の著者たちが世界中の生きとし生けるものへの害を予想している一方で、太陽や他の惑星も世界の至る所で同じ力を行使するわけではないことから影響は特定の国や都市に限られるとする占星学者もいる。たしかに星辰の影響で降る雪が世界中で同時に降るわけではないように、今回の合の影響は合の徴の下にある地域に限られる。それはアジアやスペイン、またドイツにおいてはライン川やドナウ川の沿岸といった地域で、そこでは「大洪水」ではないものの雨や雪による大きな水害が生じるだろう。それは寒さや不作や疫病だけでなく、キリスト教徒同士の、またキリスト教徒とトルコ軍の争いをもたらすだろう。しかしこれらすべては、ニネヴェの王と臣民たちのように、生活を改め心をこめて祈ることで避けられるだろう。

《特徴》それぞれの予測内容の占星術的な根拠に言及していることが多い。2月の悪しき合が大事に至らないとすれば、それは木星と金星が緩和してくれるためだが、第9ハウス¹⁸⁾にいる火星は民衆のあいだに戦いや不和をもたらしそれは聖職者たちにも及ぶこと(b4^r)、また土星が逆行する¹⁹⁾6月末から11月9日まで貴族や聖職者たちはユダヤ人、農民、老人といった土星の子らの反逆に注意せよ(b4^v)等々。また後に取り上げるCopp, Reynmann, Virdungと同様に、この合は1日だけではないのでその影響もこの1年に限ったことではないと述べている(c2^v)。冒頭にダビデの箴言からの引用があり、最後にヨハネの福音書、ヨシヤ記、イザヤ書に記された事例に言及しているのは、聖書学を修めたという経歴との関連づけと言えるだろう。

4. Joseph **Grünpeck**: „Ein Dyalogus Doctor Joseph Grünpeck von Burckhausen: do des Türkischen Kayser Astronimus Disputiert mit des Egiptischen Soldans obristem radte/ ainem verlaugneten Christen von dem glauben der Christen vnd von dem glauben des Machumeten. Nachmals von dem vierundzweintzigsten jar/ wie es mit den wassern/ kriegem/ Pestilenz/ hunger/ vnd andern erschrecklichen plagen gen sol.“ 4°, 17 Bl. Landshut: Johann Weißenburger, 1522. VD-16 G:3627, Bayerische Staatsbibliothek: 4 Polem.

18) 第9ハウスが関連する領域については諸説あるが、世界観、宗教、政治を挙げるができる。『図説 占星術事典』, 16頁参照。

19) 地球の公転速度との差で惑星が通常とは逆の方向に動いているように見えること。

1438 n.

《著者・刊本》インゴルシュタットやクラカウで学んだグリーンペク（1473年-1532年）はインゴルシュタットでラテン語の教師をしていたが、1497年に皇帝マクシミリアン一世の前で自作のラテン語の対話劇を上演したのがきっかけとなり、皇帝の官房書記および宮廷付き司祭に登用された。しかし1501年に梅毒に罹病して離職。2年後に快復したものの宮廷での要職に就くことはもはやなく、居を移しながらドイツ南部やオーストリアで医師、教師および文筆家として活動を続けた。この『ブルクハウゼンのヨーゼフ・グリーンペク博士の対話篇。トルコ皇帝の占星学者がエジプトのサルタンの最高顧問の改宗キリスト教徒と、キリスト教とマホメット教について論争する。その後24年について、洪水、戦争、ペスト、飢饉その他の恐ろしい災厄の有様について』はラテン語版が同じくランツフートで刊行されているだけだが、グリーンペクは1496年に占星術による最初の予言書を出版して以来、多くの類書を著している。²⁰⁾

《概要・結論》ヨハネス・アラブス（トルコのサルタンの宮廷占星学者）とペトルス・アルケイルス（トルコ軍に打ち負かされたエジプトのサルタンの宮廷顧問官であり改宗キリスト教徒）のあいだの往復書簡という体裁をとった著作。1524年の合についてはアブラスが、そこで起こる7つの合（木星と土星、土星と火星、火星と木星など）を、木星を驕り高ぶったキリスト教徒に、土星・火星・金星・水星をユダヤ教徒やマホメット教徒に喩えて解釈し、後者が連携して木星を押さえつけ太陽もそれに味方して勝利を収めると述べる（d3^v-d4^f）。被害に関してはいわゆる第二の大洪水ではなく、双魚宮と処女宮の下にある地域にのみ起こることで、それは十箇所のうち一箇所程度の割合だが、これらはすべて神がキリスト教徒に対して下される罰だとしている（d4^v）。

《特徴》上述の架空の往復書簡という体裁がこの著作の大きな特徴と言える。1524年の合はタイトルや序言で言及されているが、実際に論題になるのは著作の終り近くになってからで、それまでの部分は両者によるキリスト教とマホメット教に関する賛否の議論で占められている。

5. Johannes Copp: „Was auff diß Dreyundzwayntzigest vnd zum tail vyervndzwayntzigest jar. Des himels lauff künfftig sein/ Außweyß Doctoris Johannis Copp vrtayl.“ 4°, 8 Bl. [Augsburg: Heinrich Steiner], [1522]. VD-16 C:5026, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 510,50.

《著者・刊本》コップ（1490年-1558年）はウィーン大学で医学と天文学・占星学を学び、アルテンブルク（テューリングゲン）やヨアヒムスタール（ベーメン）で市の医師を務めたあと、1528年にはボヘミア王フェルディナント一世の侍医となり、更に1555年にはスウェーデン王グスタフ一世の侍医となった。宗教改革運動の熱烈な支持者だったと言われる。²¹⁾ この『23年と24年の一部に関して天の運行は今後どうなるか、ヨハニス・コップ

20) Vgl. Talkenberger (1990), S. 111f.; Deutscher Humanismus, 1480-1520, Verfasserlexikon. Bd. 1, Sp. 971ff.

博士の予言を示す』はこのアウクスブルク版の他に、エアフルト、ライプツィヒ、ウィーンでも刊行されている。²¹⁾

《概要・結論》1524年2月の合は世界中に大きな変革をもたらすと同時に大水を引き起こすが、それは神が約束して下さったようにすべてを滅ぼす第2の大洪水ではない。と言っても雨や雪による水害はひどく海辺・川辺に住む者は特に注意しなくてはならない。建物の倒壊や作物への被害、それによる飢饉ひいては争いも起こりうる。ただし天の運行が明らかでも、その影響がすぐには現れないこともある。その時（裁きの時）は既に来ているのだが、神が私達からその災厄を取り除き、星辰の影響を追い払って下さるよう祈ろう。

《特徴》最も目につく特徴は、上記のような一般的な指針と並んで、教皇、司教、枢機卿といった権力を持つ聖職者を一貫して批判していることである。冒頭に「坊さん方へ Zü der paffhayt」という題の18行の詩が掲げられているが (a1^v)、そこには「天はお前様に恐ろしい罰を与えるが、それはお前様の命取り」とある。また2月の合のうち5日の木星と火星の合は、教皇・司教・枢機卿に語るのも恐ろしいほどの大きな災禍をもたらすとしている (a2^v)。その一方で、農民は立ち上がっても財産や命を失うことが多いので自重すべきだとも書いている (b2^v)。占星術的な前提を細かく述べている箇所 (1524年2月1日に双魚宮の10度で土星と木星の合が起こる等々 [a2^v]) がある一方で、平俗の者に天体の運行は判らないはずなので予言の結果だけを述べるとしている箇所 (a3^v) もある。

6. Leonhard **Reynmann**: „Practica vber die grossen vnd manigfeltigen Coniunction der Planeten/ die im jar M. D. XXiiij. erscheinen/ vnd vngezweiffelt vil wunderparlicher ding geperen werden.“ 4^o, 12 Bl. Nürnberg: Hieronymus Hölzel, 1523. VD-16 R:1620, Bayerische Staatsbibliothek: Rar. 4096#Beibd. 10.

《著者・刊本》この『1524年に起こり、疑いなく多くの驚嘆すべき事柄をもたらす惑星の大会合と様々な合についての予言書』はニュルンベルクで2度、ライプツィヒで一度刊行されているが、²³⁾ 著者のラインマンの経歴等について詳しいことは不明。²⁴⁾

《概要・結論》神は二度と大洪水は起こさないと約束して下さったが、今回の合の場合、場所によっては大水となり溺死者も出る。海でも大きな異変が起こり、魚が死に船が沈む。また土星・木星・火星といった高い位置にある（最も外側を回っている）惑星の合は特に高い地位にある人々に害を与える。その一方で木星が支配惑星である宮（双魚宮）での合はキリスト教会における集会、すなわちそこで指導者たちが協議を行う公会議（Concilium）を意味する。一般民衆をそこに入れてはいけない。両者の間に激しい衝突が起こることになる。星辰の定めは必定だが人間の知恵でそれを緩和することはできる。こ

21) Vgl. Talkenberger (1990), S. 224f.

22) Vgl. Green (2012), S. 167.

23) Vgl. Green (2012), S. 190.

24) 著者として2箇所で自分の名を名乗っている (a1^v, c4^r)。

の世に蔓延している悪事を改め神の御加護を祈ろう。

《特徴》比喩を交えた占星術的な描写を多く用いている。例えば土星・木星・火星は双魚宮で1度ずつの距離で並んでいるが、吉星の木星は凶星の土星と火星に上下を挟まれ圧迫されている、まるで招かれざる客に自宅に押しかけられた主人のようだ (b1^r)、またこのように双魚宮で土星が木星の上位にあると人や魚が死ぬ、そして土星と木星が火星の上位にいと、空气中に熱が生じて雷や稲妻になる (b2^v) 等々。また、この合による異変は直ちに同時に至る所で生じるわけではない、土星がすべての宮を巡り終わる30年後²⁵⁾とも言われているとしながら、何時何処でどのような異変が起きるかをリストアップしている。例えば1524年には双魚宮の下にある地域で大水と地震が起こる、1533年には獅子宮の下にある地域で日照りや火災が起きる、1540年と41年には磨羯宮の下にある地域で疫病が発生し下男下女が忠義を守らず裏切りや詐欺が横行する等々。

7. Johann Virdung von Haßfurt: „PRACTICA Teütsch. UBER die neuwe erschröckliche: vor nie gesehen: Coniunction/ oder zûsammeneinigüg der Planeten Jm Jare M CCCC XXIII zükünftig.“ 4^o, 20 Bl. Oppenheim [Jakob Köbel], [1523]. VD-16 V:1310, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 511,5.

《著者・刊本》フィルドウング (1463年-1535年頃) はライプツィヒ大学で数学、天文学・占星学を学んだ後、ハイデルベルク大学で数学、天文学・占星学、医学の教鞭をとったが、プファルツ選帝侯フィリップお抱えの宮廷占星術師でもあった。この『来るべき1524年における新たな恐ろしき前代未聞の惑星の合についてのドイツ語予言書』は皇帝カール五世の求めに応じて著されたもの。²⁶⁾ オッペンハイムでの3回の刊行の他、アウクスブルク、ランツフート、ケルンでも印刷刊行されている。²⁷⁾

《概要・結論》ノアの大洪水の後も、神は悪しき者たちの国を罰することがある、しかしそれは全面的な大洪水ではなく部分的な洪水で、特に水に近い地域で起こる。水辺の動物や魚が被害を受けるが、空飛ぶ鳥にも被害は及ぶ。しかし最大の被害を受けるのは人間で、それも王族や諸侯や聖職者、特に聖職者の間で信仰をめぐる大きな争いが起こる。しかしすべての惑星が集まるこの合は、世界各地の多くの人々が共に集まることも意味する。そこで信仰の良化、改新について話し合うこともできる。神が人間に与えて下さった自由な意志を賢く用いれば、星辰の影響からも逃れることができる。悔い改め、天を造りそれを輝く星で飾られた神に祈ろう。

《特徴》この刊本は吹き荒れる嵐の中で洪水に吞まれる人々の様子を繰り返し描く挿絵がほぼ全てのページに入っている。その一種の仰々しさは、次のような論述の調子にも通じている：「この合が一日だけのことではないように、その影響も各地で一斉に始まり終

25) 土星のいわゆる公転周期のこと。

26) Vgl. Verfasserlexikon, Bd. 10, Sp. 372-375 (von Francis B. Brévar).

27) Vgl. Green (2012), S. 201. このVD-16 V:1310の前にV:1305とV:1309が刊行されたと思われるが、デジタル化されていないためV:1310に基づいて論ずる。

わるものではない、例えばようやく13年後に始まり5年4ヶ月続くものもあれば、20年後に始まって8年近く続くもの、更には31年と10ヶ月後に始まり5年4ヶ月近く続くものもある」(e^{2v})。フィルドゥングはまた、この合を支配するのは土星であり、木星は双魚宮の支配惑星であるものの、土星の悪しき光に抑えられて統治できず土星の悪い性質を幾分和らげるのみだと言う。金星も土星と共に統治することになるが、土星の悪い性質を弱めるのではなく逆に強めることになるという。それは、老いた男(土星)に嫌々ながら従っていく若い女性(金星)の中に憎しみという悪感情が生まれるのと同じだという独特の解釈を披露している(a^{3^{rv}})。

8. Sebastian **Ransmar**: „Anzaygung. vnd Auszlegung. der grossen constellacion/ vnd anderer aspectten/ so sych in dem 1524. jar/ in dem Februario erheben werden“ 4^o, 6 Bl. Augsburg: Melchior Ramminger, 1523. VD-16 R:210, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr. p. 525,15.

《著者・刊本》序文の日付は1523年8月23日、場所はグラーツとなっているが、著者として名前が記されているランスマルについては未詳。また『1524年2月に生じる大会合とその他のアスペクトの表示と解釈』はこのアウクスブルク版以外には確認されていない。²⁸⁾

《概要・結論》すべての惑星が双魚宮に集まる1524年2月には良いことは全くあるいは殆ど起こらない、双魚宮はまるで惑星の監獄や牢獄のようだと述べた(a^{2^r})あと、2月の日々のアスペクト(惑星同士がつくる角度)を取り挙げて、詳細な説明を加えていく。例えば2月1日は土星と木星が双魚宮の9度59分で合となるが、このことは冷気と風をもたらす。また最も上方にあるこの二つの惑星の合は、身分の高い人の死や支配階層における変動や損害を表すと述べている。その一方で例えば2月4日には六分(60度)という良好なアスペクトに月と太陽、月と水星が位置していて、前者は秘密や隠された物の開示や発見、後者は技芸の愛好やその高い評価を表している等々。このように月末まで惑星同士のつくるアスペクトを表記して詳細に解釈を施した後で、1524年の双魚宮における惑星合は作物に動物にそして特に人間にめったにない恐ろしい事態をもたらす、そのような運命が我々に降りかからないように改心し神の恵みを求めて祈るべきだとしている。

《特徴》惑星同士のアスペクトの解釈がこの著作のほぼ全体を占めており、また予言される内容も抽象的で一般向けとは言い難い。この著作には初版のVD-16 R:210の他にR:211が確認されているが、それはb^{2^r}までがこのランスマルの著作でb^{2^v}以降は上述のフィルドゥングの1524年の予言書が印刷されている。上記の欠点を補うための措置と言えらるだろう。なお表紙裏(a^{1^v})に掲げられたホロスコープに「北緯47½度」という表記があるが、これは序文で言及されているグラーツ市の緯度と一致する。

9. Georg **Tannstetter** (Collimitus): „Trostbüchlein“²⁹⁾ 4^o, 22 Bl. Wien: Johann Singriener d.

28) Vgl. Green (2012), S. 189.

Ä., 1523. VD-16 T:160, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 525,17.

《著者・刊本》インゴルシュタットで数学と天文学・占星学を学んだタンシュテッター(1482年-1535年)は1503年からウィーン大学で数学の講義を始める。その後1508年に医学部へ移り学部長に、また1513年に博士学位を取得してウィーン大学の総長となる。皇帝マクシミリアン一世の侍医も務めたタンシュテッターはウィーンの人文主義者サークルの中心人物だった。³⁰⁾ この『慰めの書』はラテン語版の刊行がウィーンで行われているだけだが、タンシュテッターは1505年から定期的にラテン語およびドイツ語の予言書を刊行しており、それは1525年まで続いている。³¹⁾

《概要・結論》神がノアに約束されたように「大洪水」は起こらない。神はアリストテレスの言う第一原因で、自然はそれに依存するものだ。その神が望まないのであれば、星辰のような自然から大洪水が起こることはない (b1^r)。またノアの洪水後の世界が減びるのは水によってではなく火によってである。合が起こる2月だが、それが冬の終わりである地域もあるが赤道近くの地域は逆に真夏で乾いている、これでどうして世界中で水による異変が起こりうるのだろうか (b1^v)。占星術の最高権威であるプトレマイオスは合ではなく蝕を重視した、それは誰の眼にも実際に見えることであり、特に日蝕は太陽と月の合でもある。問題の合が起こる双魚宮だが、それは吉星である木星の宿であるばかりでなく、同じく吉星の金星も双魚宮で「高揚位」に達する、³²⁾ 双魚宮では木星、金星以外は無力だと言ってもよい (b3^v-b4^r)。また過去の例を広く調べた結果、670年の2月から3月にかけてやはり双魚宮で多くの合が生じたことが判明した。ただしその年に大洪水が起こったという記録は見当たらない (c1^r-c2^v)。過去の経験というのは最も有用なものだ、無学な者たちの教えを恐れる必要はない。

《特徴》問題の惑星合まで1年を切った1523年3月20日に刊行されているが、著者はウィーン大学で天文学・占星学を教えている立場として見解を発表する義務があると述べている (a1^v)。また前年に自分の名前を騙ってウィーン滅亡を予言する詩を発表した者がおり、それによって著しく名誉を傷つけられたことも出版の動機になっているという (a2^r)。主張は聖書の記述やギリシャ哲学に基づくもの、歴史的事実や地理学の知識に由来するものが主で、占星術からは一定の距離を保っているが、双魚宮の解釈や過去の惑星合の例示のような占星術の枠内での議論も少なからず展開している。

29) タイトル (に当たる文言) が以下のように非常に長いため Trostbüchlein と略記する: *Zw eren vnd gefallen dē durchleuchtigisten ... heñn Ferdinando Printzen in Hispanien/ Ertzhertzogē zu Osterreich ... Auch zu trost seiner ... vnderthanen Lānden vnd leuten. Hat Georg Tañstetter von Rayn/ der freyen kunstē vñ ertzney Doctor/ diß gegenwurtigs buechlen ausseen lassen. Der leut hart furgenomene verwānung/ so sy aus ... vorsagung/ von ainem kunfftigen Synfluß/ ... auff s.XXiiiij Jar gefast/ abzuwenden.*

30) Vgl. Talkenberger (1990), S. 240ff.; Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 37, S. 388f.

31) Vgl. Green (2012), S. 196f.

32) 高揚位とは惑星の影響力が最も強くなる位置で、金星の場合は双魚宮の27度。根拠は必ずしも明らかではないが、宇宙生成時における惑星の位置に由来するとも考えられている。『図説 占星術事典』, 66頁参照。

10. Petrus Apian: „Practica teutsch auff Das M. CCCC. vnd xxiiij. jar durch Petrum Apianum von Leyßnick Mathematicum gemacht zů trost allen kleinmütigen.“ 4°, 8 Bl. [Landshut: Johann Weißenburger], [1523]. VD-16 A:3101, Regensburg, Staatliche Bibliothek: 999/Philos. 2280 angeb. 4.

《著者・刊本》ライプツィヒとウィーンで学んだアピアン（1495年-1552年）は1527年にインゴルシュタット大学の数学教授になる。地理学や天文学にも精通していて、1531年に記したある彗星の観察記録は後にそれが周期彗星（ハレー彗星）であることが発見されるきっかけの一つになった。皇帝カール五世もアピアンの天体観測法や彗星研究に関心を抱き、1541年には彼を宮中伯に任命している。³³⁾ この『数学者であるライスニックのペトルス・アピアンによって小心の者たちの慰めに著された1524年のドイツ語予言書』はこのランツフト版の他に印刷地不明の版が一つ確認されているだけだが、アピアンはこの後も数度に渡って予言書を刊行している。³⁴⁾

《概要・結論》この年を支配するのは悪しき火星だが、善き木星と優美な金星が立ち合っている。ただしこの年の支配星については諸説あって一致しない、ある者はアラビア派、ある者はプトレマイオス派で、土星と金星が支配星だと言う者もいれば木星と金星だと言う者もある。大会合の時には恐ろしい悪夢が人々に黒胆汁（Melancoley）をもたらす、そこで人々は噂されている大洪水が来るに違いないと思い込み恐怖や憂鬱に陥る、しかし大洪水について星辰の術から真実を究めることは私には出来ない（a3^o）。私に出来るのは不安に思う小心の者たちに幾つかの慰めの言葉を記すことだけである。ノアの時のような全面的な大洪水は起こらない、それは神が約束されていることだ、その後多くの大水が起こっているのは、神が人間に罰を与えているせいで、神はそれを星辰でお示しになるのだ。先人によれば、大会合は特に高位の人物に害をもたらす、また双魚宮での大会合によって魚のある種が絶滅する恐れがある。ただし人は先のことを知ればその影響を緩和することが出来る。

《特徴》占星術に基づく予言に関しては基本的に慎重な態度をとっている（この点については後述する）。序言で、この著作は聖職者や諸侯の方々から意見を求められて記したもので、内容も多くの先人の知見に基づくものと述べている。また「概要・結論」欄に記したように、大洪水について星辰の術から真実を究めることは出来ないと言明している。ただし星辰は神の造られたものなので、人はそれを手掛かりにして神の御意志を知ろうと努めることは出来る、また人間には星辰の影響を阻止することは不可能だが、それに由来する二次的な影響（例えば毒気を帯びた空気）に対して防備を講ずることは可能だとも述べている。巻末では、私の予言で特別に悩む人が出ないように、この星辰の影響が及ぶはずの王国、侯国、都市の名を具体的に挙げることはしなかったが、どの地域がどの宮に属しているかを知りたい時は私の前年（1523年）に向けての予言書を見ていただきたい

33) Vgl. Talkenberger (1990), S. 251f.; Neue deutsche Biographie (1953-), Bd. 1, S. 325f.

34) 1525年, 1526年, 1532年, 1539年, 1541年, 1543年, 1544年, vgl. Green (2012), S. 159.

い、と付言している。³⁵⁾

11. Aegidius **Camillus**: „Practica Teutsch zů Wien gemacht auffs M D. xxiiij. jar/ Durch Egidium Camillum auß Merhern/ Mathematicum vnnnd Doctor der Ertzney.“ 4°, 8 Bl. [Augsburg: Heinrich Steiner], [1523]. VD-16 C:591, Augsburg, Staats- und Stadtbibliothek: 4 Kult 186-121.

《著者・刊本》この『ウィーンで作成された1524年のドイツ語予言書、メーレン出身の数学者、医学博士のエギディウス・カミルスによる』はアウクスブルクで2回、レーゲンスブルクで1回刊行されている。³⁶⁾ 著者のカミルスについては、この著作のタイトルに含まれている情報以外は不明。

《概要・結論》占星学にはアラビア系とギリシャ系の2つの流れがあるが、自分はプロレマイオスをその代表者とするギリシャ系により多くの信を置いている。そこで重んじられるのはまず太陽と月、次に彗星で、諸惑星の合は最後という順列がある。たしかに1524年2月には異例に多くの惑星合が水の宮で起こるが、前年と異なって日蝕や月蝕は起こらない。おまけにこの年を支配するのは穏健で柔和な木星である。木星に次いで支配力を発揮するのは母なる金星なので、この年のあいだ物事はすべて幸福な状態にあり、巷で盛んに予言されているような恐ろしい事が起こるとは思えない。

《特徴》1524年を支配するのは木星に次いで金星だとしている (a3^v) が、別の箇所では木星と水星が他の惑星を上回ってこの年を支配する (a2^r) とも言っている。ただし水星は流動的なので、自らの性質を木星・金星の性質に混ぜ合わせることも述べている (a4^r)。

12. Johannis **Gereon** (Veit Bild): „Practica Teütsch Johannis Gereonis philosophi/ auff das M. D. XXiiij. jar/ des xlvij. Grads höhe/ des Polus.“ 4°, 8 Bl. [München: Hans Schobser], [1523]. VD-16 G:1480, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 525,19.

《著者・刊本》筆名ヨハニス・ゲーレオン、本名ファイト・ビルト (1481年-1529年) は1499年からインゴルシュタット大学で学んでいたが、1503年にアウクスブルクのベネディクト会修道院に入り終生そこで過ごす。アウクスブルクの人文主義者たちのグループに属していたが、宗教改革者のシュパラティンとも文通による交流があった。神学に関する著作を残しているが、歴史学、古典文献学、天文学・占星学の研究にも携わっていたといわれる。³⁷⁾ 『学者ヨハニス・ゲーレオンのドイツ語予言書、北緯48度の1524年に向けての』はこのミュンヘン版の他に印刷地不明の版が1点確認されている。³⁸⁾

《概要・結論》1524年は穏健な木星が金星と共に支配する、2月の双魚宮の惑星合にお

35) Apianが予言書を著したのはおそらく今回が初めてで、前年向けの予言書が刊行された形跡はない。Vgl. Green (2012), S. 159.

36) Vgl. Green (2012), S. 164.

37) Vgl. Talkenberger (1990), S. 255.

38) Vgl. Green (2012), S. 176.

いては邪悪な土星が強くなるが、それも好ましい金星によって少なからず緩和されるであろう。その惑星合のために洪水が起こり作物、特に葡萄と穀類に被害が出るのが懸念されるが、神がその御慈悲によって大きな被害を防いで下さるよう祈ろう。また双魚宮における惑星合のためにこの年の春が自らの「温・湿」という性質を保てず、作物の成長に被害の出ることが懸念される。しかしこれも神が慈悲深く和らげて下さることを望む。惑星合の影響が皆無とは言えないが、この年の2月には特別なことは起こらないと言える。ただし大量の水というのは多勢の見知らぬ大民族を意味するとも考えられる。

《特徴》終わり近くで述べられる「多勢の見知らぬ大民族 vil vnd groß vnd seltzam volck」(b2^f)に関してはそれ以上の言及はない。またゲーレオンは1524年の2月に起こる双魚宮での16の合のリストと670年の2月から3月にかけて起こったと考えられる同様の16の合のリストを掲げているが(a4^v-b1^r)、これは前述のタンシュテッターの著作から借用したものと思われる。タンシュテッターは670年に大洪水が起こったという記録は見当たらないと付言しているが、そのような説明はゲーレオンにはない。なお表題にある「北緯48度」はゲーレオンの居住地のアウクスブルク付近のことを指していると思われる。

13. Johannes Volmar: „Practica Wittenbergensis Teütsch Magistri Johannis Volmar/ nach der geburt Christi auff Tausent fünffhundert vnd vier vnd zwaintzig Jar.“ 4^o, 10 Bl. [Nürnberg: Jobst Gutknecht], [1523]. VD-16 V:2300, Regensburg, Staatliche Bibliothek: 999/Philos. 2280 angeb. 6.

《著者・刊本》フォルマルはヴィッテンベルク大学の数学教授で、宗教改革者のシュペラティンとも交流があったと言われる。³⁹⁾『修士ヨハネス・フォルマルのヴィッテンベルクのドイツ語予言書、キリストの生誕後1524年に向けて』は当該の版だけで再版された記録はないが、フォルマルは1519年から定期的に予言書を刊行していた。⁴⁰⁾

《概要・結論》この著作が大会合に言及しているのは序言中の一箇所のみで(a2^f)、土星と木星の合が大洪水を意味するのは双魚宮の14度というその合の位置に基づく、この合および他の星辰の配置からこの世の様々な大変化が説明され認識されるとだけ述べている。惑星合よりも大きく取り上げられているのが前年の8月26日に起こった月蝕で、その影響はこの年の4月に現われ3ヶ月半続き、その間に戦いや病のためにさまざまな身分の人々や魚、獣に害が及ぶとしている(a3^f)。

《特徴》全体は、年ごとに刊行される予言書のスタイルに則っていて、その年の主星について述べた後(フォルマルによれば金星)、戦争、病気、作物、民族、さまざまな階層・身分の人たち、各月の天候の様子等が語られていくが、比較的珍しいのは都市別の様子が描かれていることで、ライプツィヒ、マクデブルク、ニュルンベルク、プラハ、クラカ

39) Vgl. Talkenberger (1990), S. 261f.

40) Vgl. Green (2012), S. 202.

ウ、プレスラウといった著者の活動地域に比較的近い都市が取り上げられている。

14. Heinrich **Pastoris**: „Practica Teütsch von vergangen vnd zükünfftigen dingen/ Auß der Heyligen Geschriffte gegründet vnd gezogen/ Auff das 1524. Jar.“ 4°, 4 Bl. [Augsburg: Johann Schönsperger d. J.], [1523]. VD-16 P:900, Augsburg, Staats- und Stadtbibliothek: 4 Th H 2045.

《著者・刊本》本文の前に置かれた献辞にはイスレーベンの市民やマンズフェルトの廷臣たちの名前が挙げられている。共にルターと関係の深い町であるが、著者のパストリス（生没年不明）は本文中でもルターの名を神に選ばれた救世主として挙げている（a2^r）。この『聖書に基づき則った過ぎ去りし事および来たるべき事についてのドイツ語予言書、1524年に向けて』はアウクスブルクの他にエアフルトとツヴィッカウで刊行されている。⁴¹⁾

《概要・結論》2月の双魚宮での大会合によって、ノアの時代の大洪水のような著しい変動が起こると喧伝している者たちがいるが、私はそう考えない。様々な国の人々が神の喜ばしい御言葉へと集まるように神が指示されているのだ（a3^r）。皆が一つの印の中に集まり、永久の至福の光の中へと赴くよう示されているのだ（a3^v）。

《特徴》冒頭に大きな活字で（木星や金星ではなく）イエス・キリストがこの年の、そして全ての時の主であり師であると記されている。また主張の根拠として聖書の章句や事例が数多く引用されている。

15. Pedro **Ciruelo**: „Ein trostliche Practica Maister Peter Ceruol ausz Hispanien/ an den durchleuchtigsten Fursten Hern Ferdinanden/ Printz vnd Infanten zü Hispanien/ Ertzhertzogen zü Oesterreich [et]c. Das disz jar. xv. hundert xxiiij. keyn Sindtflus kummen werd.“ 4°, 8 Bl. Nürnberg: Friedrich Peypus, [1524]. VD-16 C:3940, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 511,1.

《著者・刊本》シルエロ（1470年-1548年）はスペインの人文主義者。パリで博士学位を取得した後スペインに戻り、アルカラ・デ・エナーレスの大学で教鞭をとる。数多くの数学、神学、哲学関係の著書の他、アリストテレスの自然学関係の著作の注釈も行っている。『スペインのペーター・ツェルオール師がスペイン王子でありオーストリア大公であるフェルディナンド殿下に宛てた、今年1524年に大洪水は来ないという慰めの予言書』の原著はカタロニア語、このドイツ語版の他に、1523年にニュルンベルクの同じ工房から刊行されたと思われるラテン語版がある。⁴²⁾

《概要・結論》1524年2月の双魚宮での惑星合によって恐ろしい大洪水が世界中に起こるといふ予言もあれば、温暖な性質の星々が冷たい性質の星々を緩和するので特別に恐ろ

41) Vgl. Green (2012), S. 187.

42) Vgl. Green (2012), S. 167.

しい事は起こらないという予言もある。前者は主にドイツで、後者はイタリアで広まっている。また前年の8月25日の月蝕が双魚宮の10度で起こるので、これが翌年の双魚宮の合の力を強めるという人もいる。ただし蝕の影響は4箇月半以上は続かないというプトレマイオスの説を根拠にして、この影響を否定する人もいる。ドイツで広まっている見解の方が信頼に足ると思うが、大水の規模は予言の十分の一にも達しないだろう。しかし安心は人々のためにならない、前もって備えれば害も少なくなる。どの説も完全に間違っている、あるいは完全に正しいということはないが、私の考えでは、前年の11月からこの年の2月まで雨量は多くなる、しかし過剰ではない。過去にもそういった冬があった、今回も乗り切れるだろう。

《特徴》冒頭で、一般庶民を教育し警告を与えて救うのが学者の役割だと述べている。学者らしく様々な意見を偏向なく吟味しているが、その分結論は当たり障りのないものになっている。また原著をそのまま翻訳したと思われるので、スペインの状況を説明したりスペインの人々に呼び掛けている場面も多い。スペインはここ100年近くほぼ毎年乾いているので洪水の心配はないという言及もある (a4^v)。

16. Pamphilus Gengenbach: „Ein Christliche vnd ware Practica/ wider ein vnchristenliche gotzlesterige vnware practica. Welche ein Bomolochischer stárnensáher hat lassen vßgon vff dz. M. CCCC. xxiiij jar.“ 4^o, 8 Bl. [Basel: Pamphilus Gengenbach], [1524]. VD-16 G:1174, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 90 h#Beibd. 9.

《著者・刊本》ニュルンベルクで植字工として働いていたゲンゲンバッハ（生年不明、1524年頃没）は1499年頃にバーセルに移住し料理人として働き始めるが、後にその店の経営者となる。1511年頃には印刷工房を設立して、一連のルター著作と並んで自らの時事的な著作や謝肉祭劇を出版する。工房からは一般民衆向けの比較的規模の小さい出版物が数多く刊行された。⁴³⁾『キリストの教えにかなう真の予言書、あるならず者の星見が1524年に向けて出版したキリストの教えに反し神を冒瀆する虚偽の予言への反駁』がこの自家工房版以外に出版された形跡はない。⁴⁴⁾

《概要・結論》1524年2月の惑星合は星辰の知らせではなく神のお力によるものだ。神のみが人の罪と償いに照らして天空全体を律しているのだ。人の病気も星からではなく神の御意志から来る。真実の証明は聖書の預言者たちではなく、プトレマイオスやアリストテレスの予言に基づくべきだと言った者がいたが、誠に由々しきことだ。哲学などはギリシャ人の自惚れた営みだ。占星術と自然哲学に神の御意志が書かれていると言う者もいるが、それは人を過ちに導く考えだ。おまけに占星術では、金星の性質は冷か暖か、毎年の支配星は何かなどで見解が異なっていることがしばしばある。神のみが天と地と人間を、神の掟を守るか否かに従って律している。神の御言葉を侮る哀れな星見達には言いたいこ

43) Vgl. Deutscher Humanismus, 1480-1520, Verfasserlexikon. Bd. 1, Sp. 889-904 (von Kerstin Prietzel).

44) Vgl. Green (2012), S. 175.

とを言わせておこう。神は彼らに報いをお与えになるだろう。

《特徴》表題のとおり、神を冒瀆し聖書の言葉を典拠としない占星術師に対する辛辣な口調の反論書。⁴⁵⁾ すべては神の御意志によるという論旨で一貫している。

17. Paulus von **Middelberg** (Ottmar Nachtigall): „Ain fast nutzlich büchlin zû diser zeit zûlesen/ Von dem Sindtfluß oder grossen wasser/ das solchs durch den einfluß des hymels nit betzaichnet/ wie etlich Astrologi vngeschicklich dauon geschriben/ auch sich niemant des besorgen soll“ 4°, 6 Bl. [Augsburg: Simprecht Ruff], [1524]. VD-16 P:1064, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 511,2.

《著者・刊本》この『目下読むのに非常に有益な、大洪水もしくは大水についての小著。占星書が不器用に記しているそのようなものは天の働きによって示されていないこと、また何人もそれを恐れる必要はないこと』はラテン語著作のドイツ語訳。原著者のミッデルベルク (1445年-1534年) はオランダ生まれで、ルーヴェン大学で哲学、神学、医学を学んだ後、ミッデルベルクに戻り大学で神学と討論術を教授。その後イタリアのパドヴァ大学に招聘され天文学・占星学を教える。1494年からはフォッソンプローネの司教の座についていた。⁴⁶⁾ 翻訳者のナハティガルはアウクスブルクで説教者を務めていたが、アントン・フッガーに依頼されてこの翻訳を行なったという (a1^v)。ラテン語の原著も (明記されていないがおそらく) 同じ工房から刊行されている。⁴⁷⁾

《概要・結論》双魚宮における惑星合によって大洪水が起こることはない。合の中心となる木星は良星で、他の惑星と合を生じてむしろ洪水を防ぐ役割を果たす。また火星や太陽が持つ「乾・温」の性質も大水を防ぐ。1523年8月25日に起こった月蝕の影響もない。月蝕の影響期間は月が欠けていた時間に応じるが、この場合は4箇月以上は続かない。そもそも「宮」は作用の原因ではなく、作用を受ける場所 (empfangung) ないし素材 (materi) で (b1^r)、合を起こす惑星の性質が「乾・温」なら双魚宮で起こっても合は洪水を意味しない。元々十二宮は自然界に根拠のあることではなく古人が設けたものだ。大洪水は起こらないと言ったが、海や川が増水して土地が浸水したり、それが雪解け水で起こったりすることはある。しかしこれも通常の範囲のことだろう。

《特徴》原著を書き終えた日付 (1523年12月1日) と翻訳者の前書きの日付 (1524年1月12日) が明記されていて、一種の切迫感を感じさせる。原著者は巻末で、聖書に基づいて反論することも出来たが、他の予言書が占星術を根拠にしているのも同じ武器 (gleichmessige waffen) で戦うことにしたと付言している。

18. Stefan **Wacker** (Stephan Vigilius): „Das kain sündfluß werd ausz der hailigen geschriff

45) Lorenz Fries (著作はデジタル化されていないため未見) のことを指すものと考えられている。Talkenberger (1990), S. 302参照。

46) Vgl. Talkenberger (1990), S. 270ff.

47) Vgl. Green (2012), S. 184.

probiert vnnd gezogen/ zů trostung den schwach glaubigen damit sie sich mügen schützen wider die Astrologos die nit dann gewässer vnnd Sindfluß fürgeben.“ 4°, 5 Bl. [Augsburg: Heinrich Steiner], 1524. VD-16 D:192, Bayerische Staatsbibliothek: Res/4 Astr.p. 511,4.

《著者・刊本》著者のヴァッカー（ヴィギリウス）に関しては詳細不明。この『大洪水は聖書に認められず基づかないこと、弱き信者が占星術師に対して身を守るための慰安、彼らも今後は大水や大洪水を言いふらさないだろう』には他にエアフルトとケルンで刊行された版がある。⁴⁸⁾

《概要・結論》聖書から数多くの事例を引いて、占星術の予言を信用しないように警告している。カルデアで占星術が盛んなのは、アブラハムがカルデア人に占星術を教えたからだなどと言う者がいるが、神はアブラハムがその術に染まらないようにその地を去らせたのだ。異教の書や占星術や哲学は何も教えない、予言は異教徒のすることだ、彼らは十二の宮、七つの惑星などと言っているがいつもお互いに言い争っている。土星と木星の大会合が我々に何の関係があるのか、魚や山羊が何を意味するかなど私には関わりのないことだ、全てを支配なさるのは神のみで、魚や山羊や牡牛ではない等々。巻末で、二度と大洪水は起こさないと神が約束されたことが繰り返し強調されている。

《特徴》前書きの日付は1524年1月25日で、「大洪水」前に刊行されたおそらく最後の関連著作だと思われる。

Ⅲ. 考察

以上、1520年から1524年までに刊行された18の著作を見て来た。まさに百家争鳴の感がある。この論争を福音主義運動との関連で考察したBarnes (1996) は人文主義者、医師、福音主義者という立場ないし職業による分類を立てて、Grünpeck, Reynmann, Virdung, Tanstetter, Apianを人文主義者、Seitz, Coppを医師、Gallianus, Gereon, Pastoris, Gengenbachを福音主義者と分類している。⁴⁹⁾ Hellmann (1914) も、論証の仕方には各著者の経歴や素養が反映されていて、占星術による論証、占星術と史実による論証、神学寄りもしくは神学と史実による論証があると述べているが、⁵⁰⁾ ここではこのHellmannの所見も踏まえつつ新たな観点から分類と考察を試みたい。

この18の著作は、「予言」とそれを導いた「論拠」に注目すると、表1のようにほぼ年代順に3つのグループに分けることが出来る。占星術を論拠にして大洪水もしくは部分的洪水を予言するのが第1のグループ (Seitz, Carion, Gallianus, Grünpeck, Copp, Reynmann, Virdung)、占星術に根拠を置きながらも洪水ないしはそれに類する事態は起こらないとするのが第2のグループ (Ransmar, Tannstetter, Apian, Camillus, Gereon, Volmar)⁵¹⁾、占

48) VD-16 W:24, VD-16 W:25.

49) Vgl. Barnes (1996), S. 153ff.

50) Vgl. Hellmann (1914), S. 18.

星術を論拠とすることを認めず、従ってそれが予言する「大洪水」も否定するのが第3のグループ (Pastoris, Gengenbach, Middelberg, Wacker) ということになる。⁵²⁾

第1のグループのなかで創世記に記されているような大洪水を予言しているのはSeitzのみだが、冒頭に寓意詩を置いてその寓意を解き明かすCarionの、同じく冒頭に聖職者を批判する詩を置くCoppの、そしてマホメット教徒と改宗キリスト教徒が交わす架空の往復書簡というGrünpeckの叙述スタイル、惑星を客と主人あるいは老人と若い女性に喩えるReynmannやVirdungの修辞法、惑星合の影響は徐々に現われしかも長期に及ぶとするGallianusやReynmannの予言内容はどれも物々しい古代的な雰囲気満ちている。Warburg (1920) はCarionやReynmannの他にTannstetterの著作にも言及しているが、惑星への恐怖や惑星の魔神たちの恐ろしい姿を語る姿勢は、主にこの第1のグループの著作から得たイメージに拠っているように思われる。

それとは対照的に第3のグループは、すべてのことは神の御意志によるもので、神のみが人の罪と償いに照らして天空全体を律している、魚や山羊や牡牛が支配しているわけではない、哲学も占星術も自然学も人を過ちに導く考えだ、従うべきは聖書の教えのみだとする (Pastoris, Gengenbach, Wacker)。Middelbergも占星術を論拠にすることと大洪水の到来を否定しているが、他の予言書と「同じ武器」で戦うために聖書に基づく議論を控え、あえて占星術の枠内での反論を展開したと述べている。惑星の性質や月蝕の影響期間に基づく議論はまさしく「同じ武器」での戦いだ、最後には黄道十二宮という占星術の基本的枠組の恣意性を指摘して、その武器の価値自体を否定している。

このグループの聖書中心主義は福音派との近さを感じさせるが、第1のグループに分類されるCoppも熱烈的な宗教改革支持者であり、Seitzもツヴィングリと近い関係にあった。⁵³⁾ ルターの周辺にはシュパラティンやメランヒトンといった占星術に通じた人物もいたことを考えると、福音派=反占星術という図式が直ちに成り立つわけではない。

Warburg (1920) はルター時代、すなわち16世紀前半を「論理Logik」と「魔術Magie」が「ひとつの幹に接ぎ木されて咲いていた」時代だとしている。⁵⁴⁾ またミシェル・フーコーは『言葉と物』の第2章「世界という散文」のなかで、16世紀の認識は「合理的な知 savoir rationnel」と、「魔術 magie」の実践から派生した概念と、古代のテキストの再発見によって何倍も権威をました一連の「文化的遺産 héritage culturel」の不安定な混淆によって構成されていたように見えると述べている。⁵⁵⁾ この「魔術」と「論理」ないし「合理的な知」の混淆の様子を垣間見せてくれるのが第2グループの著者たちの著作である。⁵⁶⁾

51) 職業別に見れば、第1グループには医師 (Seitz, Carion, Grünpeck, Copp)、第2グループには数学者が多い (Apian, Camillus, Volmar)。

52) カタロニア語で原著を書いたCirueloは、いわば局外からこの論争を観戦する立場にあったと言える。

53) Vgl. Talkenberger (1990), S. 187.

54) Warburg (2010 [1920]), S. 427. 「ひとつの幹に接ぎ木されて咲いていた auf einem Stamme geimpfet blühten」はJean Paulの„Vorschule der Ästhetik“, § 50からの引用。

Ransmarの著作は1524年2月の日々のアスペクト（惑星同士がつくる角度）を取り挙げて詳細な説明を加えている点で類例を見ない。そのアスペクトの解釈がこの著作のほぼすべてを占めているが、予言される内容は概ね抽象的なレベルに留まっている。アスペクトは地球から見た惑星間の角距離のことだが、占星術から黄道十二宮、十二のハウスといった自然界に根拠がない枠組を排除しようとする時に最後に残るものと言える。ある惑星がどの宮あるいはどのハウスに位置するかという議論には恣意性が伴うが、アスペクトは天文学的な計算に基づく客観的な情報で、その点で「合理的な知」と言える。しかし120度（三分）と60度（六分）が吉、180度（衝）と90度（矩）が凶という解釈を加えれば、そこで合理性の限界を超えることになる。

大洪水はやって来ないと主張するTannstetterの議論の基盤は、聖書の記述（神のノアへの約束、最後の審判の日に世界は水ではなく火によって滅びる等）、アリストテレス哲学（第一原因は神で自然はそれに従うもの）、地理学的知識（赤道付近の地域の2月は暑くて乾いている）、歴史的事実（670年の2月から3月にかけて同じく双魚宮で多くの合が生じたが大洪水は起こらなかったこと）と多岐に渡っているが、その一方で、最高権威のプトレマイオスに従って合より蝕を重視すべきこと、また双魚宮を支配する木星とそこで「高揚位」に達する金星の善性を強調するなど、「合理的な知」と「魔術」が、混淆というより——「ひとつの幹に接ぎ木されて」いるかのように——並存している印象がある。また、1524年2月の合を「2月1日、双魚宮10度、土星と木星；2月5日、双魚宮11度、土星と火星；2月5日、双魚宮11度、木星と火星（……）2月25日、双魚宮16度、木星と太陽；2月28日、双魚宮29度、火星と水星」のように合計17回挙げ、その後670年2月から3月にかけての合を（おそらく緻密な計算の末）「2月4日、双魚宮3度、土星と木星；2月6日、双魚宮3度、土星と水星；2月7日、双魚宮3度、木星と水星（……）3月21日、双魚宮28度、金星と水星；3月24日、双魚宮26度、火星と水星」と計16回こと細かに挙げて比較して行くその姿勢には、非合理的な予言に合理的な手段で迫るといった齟齬を指摘することもできるが、人心を安定させるという最終目標のための方策と考えられる。

様々な人に意見を求められるので、1524年の星辰の様子を自分はまだ見通していないものの、高名な大家たちの流儀にならって予言書を記すというApianは、占星術に対して慎重で懐疑的な調子で論述を始めている。曰く、占星術が不評を買っているのは、将来の出来事は星の影響によってのみ生ずると主張しているためで、アウグスティヌスをはじめとする名だたる教父方もそれに反論しているが、占星術の大家プトレマイオスも「賢者は星を支配する」と述べている点では同意見と言える。神の本質を見ることは出来ないが、ダビデが「天は神の栄光を顕す」と述べているように、神の被造物である星辰を手がかり

55) Foucault (1966), S. 47. 渡辺一民、佐々木明訳：『言葉と物—人文科学の考古学』、57ページを参照した。

56) その6名の著作家のうちCamillusとVolmarは合より蝕を重視するギリシャ系占星術に基づいて、またGereonは占星術による論述を展開しながら神の御慈悲をひたすら祈る修道僧として大洪水の到来を予言していないので、以下では詳述しない。

にしてそれを認識することはできる、ただし占星術師たちはいつも「自らの見解を交えて mit irer menung」考察している等々。この「序論」に続く節のタイトルは「この年の主人」だが、Apianは一転して、自分の意見では凶悪な火星が1524年の支配星だが、善き木星と優美な金星が傍らに控えていて、この二つの星の威力は前年の8月25日の日蝕の時からこの年の4月まで及ぶと占星術的に述べる。ただし、この年の支配星に関してはアラビア派が土星と金星、プトレマイオス派が木星と金星としており、意見が分かれていると客観的な考察も加えている。次の節は「大会合の影響」で、曰く、アラビア派を代表するアブー・マアシャルによれば大会合の時には恐ろしい悪夢が人々に黒胆汁（Melancholey）をもたらす、そこで人々は噂されている大洪水が来るに違いないと思ひ込み恐怖や憂鬱に陥る、しかし大洪水について星辰の術から真実を究めることは私には出来ない、出来るのは小心の者たちに隣人愛をもって慰めの言葉をかけることだけだと冷静に自らの姿勢を確認している。まずは、二度と大洪水は起こさないという神の約束を信じなくてはいけない、その後も大水は起きているが、それは神の悔い改めへの警告なのだ、しかし神がこれを星辰の印によって予告することはある、この1524年の惑星合で何が起こるかについてアブー・マアシャルは火星の位置から大雨と戦争を予言しているが、私の見立てによれば土星が北風と冷気をもたらし、火星がそれを中和することになる、また合に関与する木星の性質を勘案すると今回は人間に有用な家畜に特に害が出ると思われる…と徐々に占星術による自らの見立てに移行していく。その後は、双鱼宮での大会合では魚のある種が絶滅する恐れがある、そしてアラビア派のマッサーラも言うように土星と木星の合が戦いを意味する第7ハウスで起きると大きな戦争になる、その合に火星が加わると更に事態はひどくなる等々、占星術による予言の世界へとますます踏み込んでいく。「合理的な知」から出発して「文化的遺産」を渉猟しながら、徐々に「魔術」の世界へと脚を踏み入れていく様子を窺うことが出来る。

IV. 結語

18点の著作を出版年に従って見れば、物々しく古代的な論調の第1グループの著作が第2、第3グループの著作の登場によって徐々に影が薄くなっていったような印象が生じるかもしれないが、第1グループの著作（特にSeitz, Carion, Copp, Reynmann, Virdungのもの）は初版後も版を重ねていた。著作者たちの語り口にはこの間に変化が生じていたものの、当時の一般民衆にとっては百家争鳴のまま、物々しく古代的な論調、合理性と魔術性の混淆、ストイックな宗教的呼びかけが同時に存在していたと思われる。そういった状況のなかで人々は1524年2月を迎えることになった。

その月になっても大きな気象の変化は起こらなかった。降水量が増えた地域もあったと言われるが、その年の気候はむしろ例年よりも穏やかだったとする報告もある。⁵⁷⁾ 自分たちの祈りを聞き届けて下さった神に感謝する者たちがいる一方で、ちょうど始まったそ

の年の謝肉祭では占星術師たちを公然と嘲笑し揶揄する出し物が行われた地域もある。⁵⁸⁾しかしこれですべて暗雲が吹き払われたわけではなかった。惑星合の影響は数年経ってようやく現れるほどの威力を持つものだという予言も人々の記憶に重苦しく残っていただろう。1524年の半ばにはスイスおよび南部・中部ドイツで農民たちの反乱が起こり、時代は宗教改革の騒乱期に突入して行くことになる。

文献一覧

- Barnes, Robin Bruce: *The Flood Panic, Medieval Prophetic Traditions, and the German Evangelical Movement*. In: *Storia e figure dell' Apocalisse fra '500 e '600*. Hrsg. von Roberto Rusconi, S. 145-162. Rom (Viella) 1996.
- Baufeld, Christa: *Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Lexik aus Dichtung und Fachliteratur des Frühneuhochdeutschen*. Tübingen (Niemeyer) 1996.
- Becker, Udo: *Herders Lexikon der Astrologie*. Erfstadt (Hohe) 1981. 種村季弘監修, 池田信雄, 池田香代子, 鈴木仁子訳: 『図説・占星術事典』(同学社, 1986年)。
- Brant, Sebastian: *Narrenschiff*. Hrsg. von Friedrich Zarncke. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1964. Unveränderter reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854.
- Foucault, Michel: *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines*. Paris (Gallimard) 1966. 渡辺一民, 佐々木明訳: 『言葉と物—人文科学の考古学』(新潮社, 1974年)
- Ginzburg, Carlo: *Il nicodemismo. Simulazione e dissimulazione religiosa nell'Europa del '500*. Torino (Einaudi) 1970.
- Green, Jonathan: *Printing and Prophecy. Prognostication and Media Change 1450 – 1550*. Michigan (The University of Michigan Press) 2012.
- Hellmann, Gustav: *Aus der Blütezeit der Astrometeorologie. J. Stöfflers Prognose für das Jahr 1524*. In: ders.: *Beiträge zur Geschichte der Meteorologie*. Bd. 1, Nr. 1, S. 3-102. Berlin 1914.
- Mentgen, Gerd: *Astrologie und Öffentlichkeit im Mittelalter. Monographien zur Geschichte des Mittelalters*, Bd. 53. Stuttgart (Hiersemann) 2005.
- Talkenberger, Heike: *Sintflut. Prophetie und Zeitgeschehen in Texten und Holzschnitten astrologischer Flugschriften 1488-1528. Studien und Texte zur Sozialgeschichte der Literatur*, Bd. 26. Tübingen (Niemeyer) 1990.
- Tester, Jim: *A History of Western Astrology*. Woodbridge, Suffolk, New Hampshire (Boydell)

57) Vgl. Mentgen (2005), S. 149ff.

58) Vgl. ebd., S. 143ff.

1987. 山本啓二訳：『西洋占星術の歴史』（恒星社厚生閣，1997年）。
- Warburg, Aby: Heidnisch-antike Weissagung in Wort und Bild zu Luthers Zeiten. In: Werke in einem Band. Auf der Grundlage der Manuskripte und Handexemplare. Hrsg. und kommentiert von Martin Treml, Sigrid Weigel und Perdita Ladwig. S. 424-491. Berlin (Suhrkamp) 2010 [1920]. 伊藤博明監訳，富松保文訳：『ルターの時代の言葉と図像における異教的=古代的予言』（ありな書房，2006年）。
- Zambelli, Paola (Hg.): ‚Astrologi hallucinati‘. Stars and the End of the World in Luther’s time. Berlin, New York (Gruyter) 1986.
- Allgemeine Deutsche Biographie. Hrsg. durch die Historische Commission bei der Königlichen Akademie der Wissenschaften. Berlin (Duncker & Humblot) 1967-1971. Neudruck der 1. Aufl. von 1875-1912.
- Deutscher Humanismus. 1480-1520. Verfasserlexikon. Hrsg. von Franz Josef Worstbrock. Bd. 1: A-K. Berlin, New York (Gruyter) 2008.
- Die deutsche Literatur des Mittelalters: Verfasserlexikon. Begründet von Wolfgang Stammer, fortgeführt von Karl Langosch. Zweite völlig neu bearbeitete Auflage unter Mitarbeit zahlreicher Fachgelehrter. 14 Bde. Berlin, New York (Gruyter) 1977-2008.
- Frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Hrsg. von Ulrich Goebel und Oskar Reichmann. Bd. 2, bearbeitet von Oskar Reichmann. Berlin, New York (Gruyter) 1994.
- Neue deutsche Biographie. Hrsg. von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Berlin (Duncker & Humblot) 1953-.
- 田中 純：アビ・ヴァールブルク 記憶の迷宮（青土社，2001年）。
- 藤井 明彦：1524年の「大洪水」のホロスコープ [『ワセダ・ブレッター』第25号，2018年，131-140頁]。
- 森田 安一：宗教改革期の占星術—1524年の大会合へむけて— [『日本女子大学文学部紀要』第58号，2009年，35-54頁]。同氏：木版画を読む 占星術・「死の舞踏」そして宗教改革（山川出版社，2013年）に再録。

参照原典のVD-16 (Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des XVI. Jahrhunderts) 番号一覧

A:3101 (10. Petrus Apian), C:591 (11. Aegidius Camillus), C:1030 (2. Johannes Carion), C:3940 (15. Pedro Ciruelo), C:5026 (5. Johannes Copp), D:192 (18. Stefan Wacker), G:224 (3. Conrad Gallianus), G:1174 (16. Pamphius Gengenbach), G:1480 (12. Johannis Gereon), G:3627 (4. Joseph Grünpeck), P:900 (14. Heinrich Pastoris), P:1064 (17. Paulus von Middelberg), R:210 (8. Sebastian Ransmar), R:1620 (6. Leonhard Reynmann), S:5396 (1.

Alexander Seitz), T:160 (9. Georg Tannstetter), V:1310 (7. Johann Virdung), V:2300 (13. Johannes Volmar)

表1：それぞれの著作の予言内容と論拠

著者	出版年	予言内容	論拠
Seitz	[1520]	大洪水	占星術
Carion	[1521]	部分的洪水	占星術
Gallianus	[1521]	部分的洪水	占星術, 聖書
Grünpeck	1522	部分的洪水	占星術
Copp	[1522]	部分的洪水	占星術
Reynmann	1523	部分的洪水	占星術
Virdung	[1523]	部分的洪水	占星術
Ransmar	1523	良い事は起こらない	占星術 (アスペクト)
Tannstetter	1523	大洪水は起こらない	占星術, 聖書, アリストテレス哲学, 地理学的知識, 歴史的事実
Apian	[1523]	大洪水は起こらない	占星術の否定と肯定, 聖書
Camillus	[1523]	幸福な状態	占星術 (蝕を重視)
Gereon	[1523]	特別な事は起こらない	占星術
Volmar	[1523]	様々な大変化の可能性	占星術 (蝕を重視)
Pastoris	[1523]	著しい変動は起こらない	聖書
Ciruelo	[1524]	雨量がやや増える可能性	諸説の比較
Gengenbach	[1524]	特別な事は起こらない	聖書, 反占星術
Middelberg	[1524]	特別な事は起こらない	「同じ武器」としての占星術
Wacker	1524	大洪水は起こらない	聖書, 反占星術

図1: 1524年2月の各惑星の位置 (Stöffler/Pflaum: Almanach nova, 1499より [München, BSB: Ink S-591])

1524	♈ ♉ ♊ ♋ ♌ ♍ ♎ ♏ ♐ ♑ ♒ ♓											
Februarius	☉	☽	♁	♂	♃	♂	♃	♂	♃	♂	♃	♂
	☉	☽	♁	♂	♃	♂	♃	♂	♃	♂	♃	♂
Brigide vir.	1 21	58 17	52 9	58 9	59 7	40 0	14 8	28 29	15			
Purificatio	2 22	58 29	51 10	5 10	13 8	26 1	30 10	18 29	12			
Blasij	3 23	59 11	48 10	12 10	27 9	12 2	45 12	9 29	8			
Agathe vir.	4 24	59 23	44 10	19 10	41 9	59 4	1 14	1 29	5			
Dorothee vir.	6 27	0 17	23 10	34 11	9 11	32 6	32 17	45 28	59			
♁	7 28	1 29	6 10	42 11	23 12	18 7	47 19	39 28	56			
♁	8 29	1 10	49 10	49 11	37 13	5 9	32 31	33 28	53			
♁	9 0	1 22	40 10	57 11	51 13	51 10	18 23	28 28	49			
♁	10 1	1 4	52 11	4 12	6 14	38 11	33 25	22 28	46			
♁	11 2	2 17	30 11	12 12	20 15	24 12	48 27	16 28	43			
♁	12 3	2 0	32 11	19 12	35 16	11 14	3 29	9 28	40			
♁	13 4	2 13	48 11	27 12	49 16	57 15	18 1	3 28	37			
♁	14 5	2 27	21 11	34 13	4 17	43 16	33 2	57 28	34			
♁	15 6	2 11	22 11	42 13	18 18	29 17	48 4	51 28	30			
♁	16 7	2 25	46 11	50 13	33 19	15 19	3 6	44 28	27			
♁	17 8	3 10	23 11	57 13	47 20	1 20	18 8	38 28	24			
♁	18 9	3 25	6 12	5 14	2 20	47 21	33 10	31 28	21			
♁	19 10	3 9	50 12	13 14	16 21	33 22	47 12	24 28	18			
♁	20 11	3 24	36 12	20 14	31 22	19 24	2 14	16 28	14			
♁	21 12	3 9	20 12	28 14	45 23	5 25	16 16	8 28	11			
♁	22 13	3 24	2 12	36 14	59 23	51 26	31 18	0 28	8			
♁	23 14	2 8	32 12	44 15	14 24	37 27	45 19	51 28	5			
♁	24 15	2 22	37 12	51 15	28 25	23 29	0 21	41 28	2			
♁	25 16	2 6	19 12	59 15	42 26	9 0	15 23	31 27	59			
♁	26 17	1 19	38 13	7 15	57 26	55 1	29 25	19 27	55			
♁	27 18	1 2	33 13	15 16	11 27	41 2	44 27	7 27	52			
♁	28 19	1 15	8 13	23 16	25 28	27 3	59 28	55 27	49			
♁	29 20	0 27	18 13	31 16	39 29	13 5	13 0	40 27	46			
♁			1 1	32 0	58 0	7 0	56 1	58				
♁			10 1	32 0	57 0	6 1	1 1	58				
♁			20 1	31 0	57 0	5 1	4 1	21				
Latitudo planetarum ad diem												

左列の数字 (1~29) は2月 (Februarius) の日付。左上のFebruariusの文字の右側に並ぶ記号は順に太陽, 月, 土星, 木星, 火星, 金星, 水星, 龍の頭。その下の列には黄道十二宮が記されていて, 太陽, 水星, 龍の頭の下は宝瓶宮, 月の下は磨羯宮, 土星, 木星, 火星, 金星の下は双魚宮の記号。「21 58」や「17 52」といった数字は宮 (各30度) のなかでの位置を示す (21度58分, 17度52分)。最も動きの速い月はこの間に黄道十二宮を一周している。

Vorhersage einer ‚Sintflut‘ im Jahre 1524

Zu einer astrologischen Debatte in der frühen Neuzeit

FUJII Akihiko

Der Mathematiker und Astrologe Johannes Stöffler veröffentlichte im Jahre 1499 in Zusammenarbeit mit Jacob Pflaum den „Almanach nova“, die Ephemeriden (die Vorausberechnung der Positionen der Himmelskörper) für die Jahre 1499 bis 1531. In diesem Buch hat er warnend darauf hingewiesen, dass es im Februar 1524, einem Monat, in dem insgesamt zwanzig Konjunktionen der Planeten stattfinden und 16 davon wässerige Zeichen (Wassermann und Fische) haben, zu einer großen Katastrophe kommen werde. Die Angst vor einer zweiten ‚Sintflut‘ war so groß, dass damals in ganz Europa mindestens 59 Autoren in insgesamt 69 Schriften – davon mindestens 27 auf Deutsch – das Thema erörterten, ob eine Katastrophe nun tatsächlich eintreten werde.

Gustav Hellmann (1914) hat als erster auf diese Sintflutpanik mit einer ausführlichen Auflistung der betreffenden Schriften aufmerksam gemacht. Aby Warburg (1920), der die Fresken im Palazzo Schifanoja in Ferrara unter astrologischen Gesichtspunkten überzeugend analysiert hatte, zog auch diese astrologisch veranlasste Debatte als Gegenstand seiner Untersuchung heran, wobei sich seine Studie auf die Analyse der Holzschnitte in einigen Schriften beschränken musste. Heike Talkenberger (1995) hat das Thema erneut aufgegriffen. Ihre Monographie zeichnet sich durch eine sehr ausführliche ikonographische Betrachtung der Holzschnitte aus, aber mit dem Text selber, dessen Inhalt überwiegend astrologisch ist, hat sie sich auch nicht auseinandergesetzt. Der 2005 erschienene Beitrag von Gert Mentgen wendet sich mit dem Begriff der ‚Öffentlichkeit‘ von Jürgen Habermas der Analyse der Reaktionen der damaligen Bevölkerung auf die bedrohlichen Prophezeiungen zu.

Die Beschäftigung mit dem Textinhalt ist also immer noch ein Desiderat, obwohl die meisten Schriften im Grunde astrologisch argumentieren. Der Verfasser der vorliegenden Arbeit hat 18 deutsche Autoren, deren Schriften digitalisiert verfügbar sind, zur Lektüre herangezogen: Alexander Seitz, Johannes Carion, Conrad Gallianus, Joseph Grünpeck, Johannes Copp, Leonhard Reynmann, Johann Virdung, Sebastian Ransmar, Georg Tannstetter, Petrus Apian, Aegidius Camillus, Johannis Gereon, Johannes Volmar, Heinrich Pastoris, Pedro Ciruelo, Pamphilus Gengenbach, Paulus von Middelberg und Stefan Wacker. Unter dem Gesichtspunkt, was und aus welchen Gründen sie prophezeien, lassen sich die Autoren und ihre Schriften in drei Gruppen einteilen. Von den Vertretern der Gruppe I

(Seitz, Carion, Gallianus, Grünpeck, Copp, Reynmann, Virdung) wird mit einer oft archaisch und magisch wirkenden Argumentation vor einer mehr oder weniger großen Katastrophe gewarnt. Die Gruppe II (Ransmar, Tannstetter, Apian, Camillus, Gereon, Volmar) stützt sich grundsätzlich auf astrologische Beweisführungen, aber sie kommt nicht zu einer apokalyptischen Schlussfolgerung. Die Gruppe III (Pastoris, Ciruelo, Gengenbach, Middelberg, Wacker) wirft der Astrologie Aberglauben vor und lässt ihre Weissagungen nicht gelten. Diese Autoren richten sich strikt nach den Bibelworten.

Aby Warburg (1920) bezeichnet die Zeiten Luthers, also die erste Hälfte des 16. Jahrhunderts als eine Epoche, in der „Logik und Magie wie Tropus und Metapher (nach den Worten Jean Pauls) »auf einem Stamme geimpfet blühten«“. Für Michel Foucault (1966) stellen die Kenntnisse des 16. Jahrhunderts eine instabile Mischung aus „savoir rationnel“, „magie“ und „héritage culturel“ dar. Die Mischung von Magie und Logik bzw. „savoir rationnel“ begegnet uns gerade in den Schriften der Gruppe II. *Sebastian Ransmar* gibt z. B. die einzelnen ‚Aspekte‘ (d. h. die bestimmten Winkel zwischen zwei Planeten) im Februar 1524 an und stellt sie zur Auslegung. Beim Aspekt handelt es sich, anders als beim Tierkreis und den Himmelshäusern, um astronomisch ermittelte objektive Daten. Insofern gehören sie zum rationalen Wissen, aber interpretiert man etwa den Winkel von 120 Grad als Drittelschein (Trigonal) und hält ihn für den freundlichsten und günstigsten Aspekt, oder den von 180 Grad als Gegenschein (Opposition) und nimmt ihn als ungünstig an, dann überschreitet man bereits die Grenzen des Rationalen. Bei *Georg Tannstetter* überwiegen die rationalen Beweisführungen wie Bibelzitate, philosophische Diskussionen Aristoteles, geographische Kenntnisse und historische Tatsachen, er behauptet aber auch, dass die Sonnen- und Mondfinsternis nach der Lehre des großen Ptolemäus der Konjunktion vorzuziehen ist. Und aus seiner beschwichtigenden Betonung, dass der gütige Jupiter Herr des Zeichens der Fische ist und die ebenfalls gütige Venus sich in dem Zeichen gerade ‚erhöht‘, wird klar, dass er auch in der Astrologie über ausreichende Kenntnisse verfügt. Bei ihm sind ein rationales Wissen und Magie eben nicht gemischt, sondern präsentieren sich nebeneinander wie „auf einem Stamme geimpfet“.

Petrus Apian habe seine Prophezeiung nicht von sich aus, sondern aufgrund zahlreicher Anfragen veröffentlicht. Er selber habe die Läufe der Gestirne im Jahr 1524 noch nicht ganz überschaut, trotzdem habe er sich entschieden, seine Schrift nach der Manier der großen Meister zu verfertigen. In der Vorrede spricht er durchgängig skeptisch vom astrologischen Vorgehen, alle künftigen Dinge allein auf den Einfluss der Gestirne zurückzuführen. Im ersten Kapitel „Von den Herrn ditz jars“ redet er nun ganz astrologisch vom boshaften Mars als Herrscher des Jahres, der jedoch ganzjährig vom gütigen Jupiter und der „holdseligen“ Venus begleitet wird. Er fügt aber auch objektiv hinzu, dass die arabische Schule Saturn und Venus, die griechische eher Jupiter und Venus zum Jahresherrscher erwählen. Im zweiten

Kapitel „Von dem einfluß der grossen Constellation“ erklärt er zunächst, dass er von der grausamen und erschrecklichen Sintflut „keine warheit auß der kunst der gestirn ergrunden mag“. Er habe also keine andere Wahl, als alle kleinmütigen Herzen aus brüderlicher Liebe zu trösten. Man solle nämlich an das Versprechen Gottes glauben, „[...] nimmermehr werden die Wasser der Sintflut das ganze Fleisch austilgen“ (Gen 8, 21). Inzwischen sind zwar auch viele „kleine syndfluß“ geschehen, aber das seien bloße Mahnungen Gottes an die Menschheit. Der Herr mahnt aber auch mit den Mitteln der Gestirne, und nach der Lehre des großen Albumasars werde wegen der Konjunktion in jenem Jahr der Mars viel Regen und Krieg herbeiführen. Er selber sei der Ansicht, dass der Saturn viel Wind und Kälte von Norden bringen wird und der Mars diese Kälte zu temperieren hat. Aus der Berücksichtigung der Natur des Jupiters müsse er aber auch befürchten, dass große Schäden „in den vierfussigen thieren die zu menschlichem nutz gebraucht werden“ entstehen... Auf diese Weise geht er immer weiter zu seinen eigenen astrologischen Prognosen über, z. B. dass wegen der Konjunktion im Zeichen der Fische etliche Arten sterben oder gänzlich ausgerottet werden. Apian ist, vom Standpunkt des rationalen Wissens ausgehend, mit den Recherchen des kulturellen Erbes allmählich und immer weiter in die magische Sphäre übergegangen.